

◆ 第9回 泌乳中・後期の飼養管理

～乾乳期は粗飼料主体、濃厚飼料は乳量低下に見合った量を～

乳牛の飼養管理は乾乳期がポイントなどと言われていますが、それでは手遅れです。乾乳期は粗飼料主体の管理時期ですから、やれることは限られてしまいます。泌乳中後期から次の分娩（ぶんべん）に対する準備をする必要があります。

最近では泌乳最盛期の延長する傾向はありますが、少なくとも分娩後4カ月以降（うまくルーメン発酵で牛を飼いこなしている牛群は2、3カ月以降）はサプリメントの給与をやめ、乳量の低下に見合った濃厚飼料給与量にしていくべきです。

濃厚飼料で乳量を引っ張る、などということを行っている、次の分娩後に種々のトラブルが生じます。このようなことをしている牛群では、泌乳中期・後期に肝臓機能が低下し、ひどいときにはこの時期のほとんどの牛が肝障害になります。でも臨床症状として現れないため、“乳はでるし病気はしないし、絶好調！”と誤解しているわけです。

しかしこのような牛群は判で押したように、分娩後に病気が多発し、産乳成績が低下し、繁殖が悪くなるのです。1日あたり乳量が多いほど、乳代から飼料費を差し引いた粗利益は大きくなります。

ですから乳量が低下し始めたら次の最高泌乳期に向けて、最高の状態をつくることを心がけるべきです。この時期にやりすぎて乾乳期にやせさせることは最悪のパターンです。ダイエットは肝臓への負担が大きく、それを乾乳期に行うことは百害あって一利なしです。

逆に、やせすぎた牛のボディコンディションの回復はそう簡単にはいきません。濃厚飼料で太らせようとすると乳量が落ちず、かつ余分な脂肪は体表に付き、重要な骨盤腔内の脂肪はついてきません。濃厚飼料に頼らずに1、2年の時間をかけて、ルーメン発酵でじっくりと調整するしかありません。

いずれ、体重（ボディコンディション）の急激な増減は、牛にとっては最悪なことです。

